

史跡斎宮跡の再現行事とその課題

－ 史跡の歴史性とわかりやすいイメージのバランスの探求 －

大川 勝宏 （斎宮歴史博物館）

1. はじめに

（1）史跡斎宮跡の概況

史跡斎宮跡は、三重県の伊勢平野の南部、現在の松阪・伊勢の両市に挟まれた、多気郡明和町（人口約22,500人：史跡の管理団体）のほぼ中央の平坦な台地上に位置する。斎宮とは、天皇が律令国家の整備とともに、皇祖神として位置付けた伊勢神宮の祭祀に、自らの代理として未婚の皇族女性を、国家祭祀の権限を託す「斎王」として派遣するため、多気の地に造営した宮殿をさすものであり、広義には斎王の宮を支えた斎宮寮の官衙も含まれる。令外官である斎宮寮は、天皇が変わり斎王が定められるたびに設置され、最盛期には13の司と500人以上の官人を擁する大規模な国家機関だった。記録の上では飛鳥時代の終わりから南北朝時代の初めにかけて、約660年間にわたって存続し、その間に斎王の宮の移動もあり、斎宮跡は昭和54年（1979）3月に約137haという広大な面積が国の史跡指定を受けている（図1）。

斎王は、その在任中、天皇に代わり6・9・12月の年三回の伊勢神宮での国家的な祭祀に参加・奉仕することをその務めとしていた。それ以外は斎宮で多くの女官に囲まれ、都と同様の暮らしぶりであったとされ、事実、発掘調査により位置が突き止められた平安時代の斎王の宮「内院」からは緑釉陶器や貿易陶磁、大量の土器や、調度品などを飾ったとみられる金銅製品が出土し、高度な文化的空間を為していたことが判明している。昭和45年（1970）度か

ら令和2年度で50周年を迎えた考古学的な発掘調査は、江戸時代から昭和にかけては密やかな社のように考えられてきた斎宮のイメージを劇的に変えてきた。しかし、斎宮の実態を示す文字記録は少なく、史料としては『延喜斎宮式』や『類聚三代格』の他、『春記』『西宮記』『江家次第』など、また文学の世界でも『伊勢物語』を代表に、『源氏物語』や『大和物語』などにわずかに登場するのみである。さらに、標高10～15mの台地上に立地する斎宮では、他の都城・官衙遺跡にみられる木簡や漆紙文書が全く見つかっておらず、地上に往時をしのばせる遺構も見えないため、斎宮の具体的なたたずまいや、斎王や官人の生々しい生活の様子をイメージすることは難しい。こうしたことから、斎宮は「幻の宮」とも呼ばれてきた。斎宮が有する皇室・伊勢神宮との深い関係性は、史跡にオンリーワンの歴史的・文化的価値を与えるものであるが、その一方で、斎宮跡は一般には理解しイメージしにくい史跡であるとも言える。

（2）斎宮跡の史跡整備

史跡内の発掘による解明が進むのにあわせて、斎宮の「わかりにくさ」を補い、文化財を活用できるよう、行政による様々な施設整備も進めてきた。昭和58年（1983）度に史跡中央部の、かつては斎宮の中心ではないかと考えられてきた「斎王の森」地区の史跡公園整備を行ったのをはじめとして、主なものを見ていくだけでも、平成元年度には斎宮の情報発信の拠点となる県立の斎宮歴史博物館が開館し、平成5年（1993）度には博物館南の「ふるさと芝生

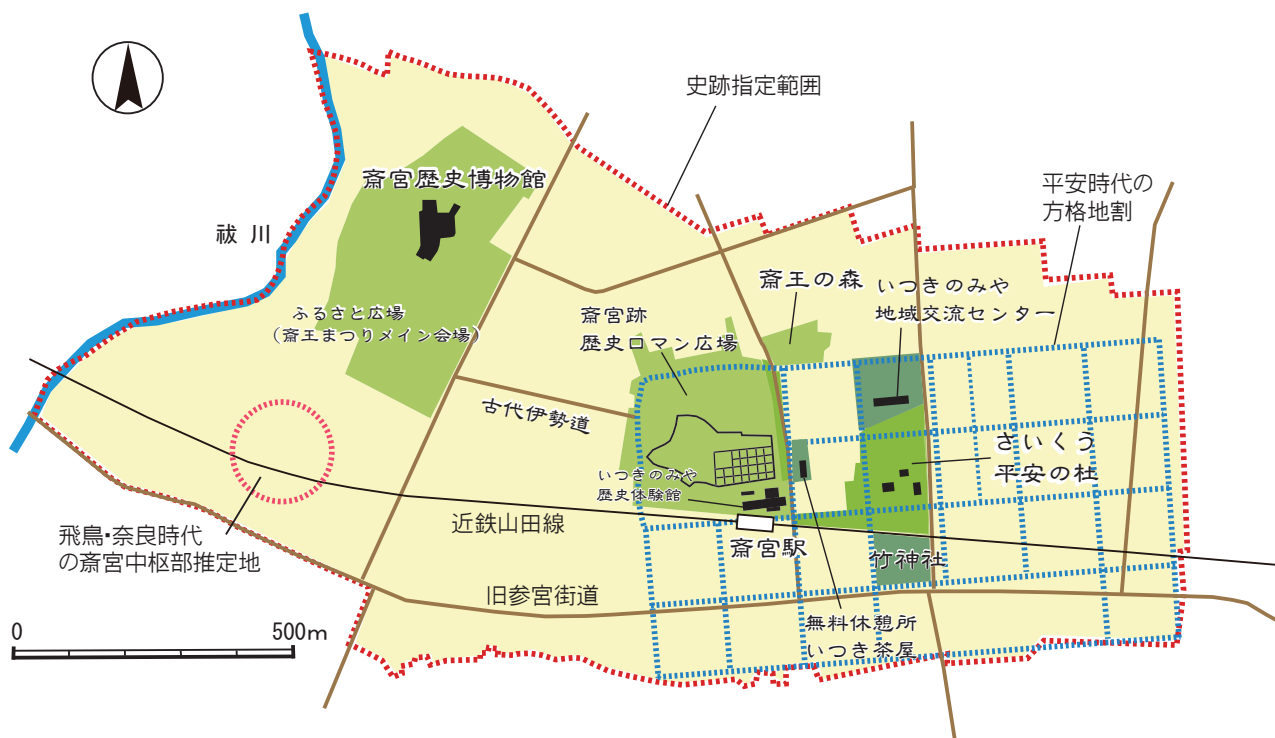


図1 史跡齋宮跡全体図

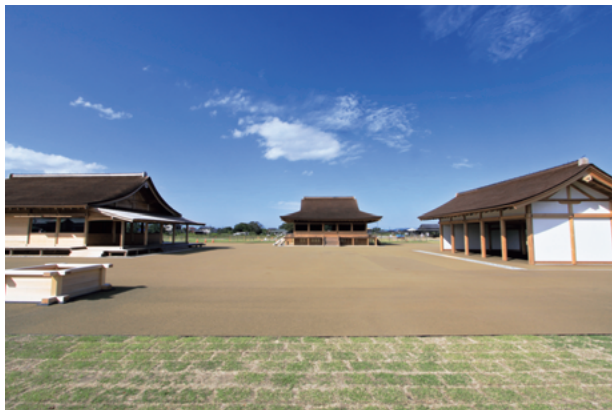


図2 史跡公園「さいくう平安の杜」



図3 第1回齋王まつり

広場」、平成11年度には、史跡のガイダンスと歴史体験の施設で、平安時代の寝殿造り等をイメージした「いつきのみや歴史体験館」、平成13年度に広大な史跡を視覚的に理解するための史跡10分の1模型を含む「齋宮跡歴史ロマン広場」、平成27年度には、平安時代初期の齋宮寮庁と推定される復元建物三棟を中心とした史跡公園「さいくう平安の杜」(図2)、史跡内を貫通する幅約9mの「古代伊勢道」約350mを復元する整備を県が文化庁の2分の1の補助金を得て行った。

また、史跡管理団体である地元明和町も、来訪者のための施設として、平成15年度に無料休憩施設を資源エネルギー庁(当時)の電源立地交付金を活用して整備したほか、平成24年度に国土交通省他による「明和町歴史的風致維持向上計画」の採択を受けたことにより、史跡内の回遊路やポケットパーク、「いつきのみや地域交流センター」や、近鉄齋宮駅の史跡公園口などの整備を行っている。これらは、昭和53年に結ばれた当時の副知事と町長の覚書による、県・町の役割分担に基づいている。

(3) 斎宮跡の活用

史跡斎宮跡では史跡指定地内に約2,000人の住民が暮らし、私鉄の斎宮駅や小学校までその範囲に含んでいる。また、斎宮跡の発見の契機は、現在の史跡西部にあたる古里地区での住宅団地の開発造成であったことなどから、史跡指定にあたっては保存のみならず地域振興の起爆剤となることも期待された。これにより、斎宮では、行政・住民・関係団体により、まちづくりのための活動と発信が行われてきた。昭和58年（1983）度に地元の婦人会が中心になり、斎王の御霊を慰めようとスタートした「斎王まつり」（図3）は令和2年で第38回を迎えた三重県を代表するまつりのひとつにまでなっている。先述の史跡整備の進展が、地元の意識を変えてきたことは確かである。

しかし、斎宮跡は約137haと広大で、指定後に発掘による解明が追いかけるように進められているため、斎宮の発信・活用と史跡の実態にはしばしば懸隔が見受けられる。特に（わかりにくい）斎宮の歴史や性格のうち、平安時代の中でも十二単を着た姫君や、京都の葵祭などのイメージが先行し、本来極めて特異性のある斎宮の在り方に目を向けられにくい。また、伊勢神宮との強い関係性は、斎宮跡の活用にあたって慎重な対応も求められる点である。次章以降では、「斎宮まつり」など斎宮跡での歴史的な再現性を持つ行事それぞれの特性と課題を整理していきたい。

2. 斎宮跡での再現的行事とその運営

(1) 斎王まつり

1) 斎王まつりの沿革

史跡斎宮跡で、斎宮の時代や性格を反映させた最も歴史のある行事は、先述した「斎王まつり」である。昭和58年3月28日に、斎宮婦人会が斎宮地区商工会の協賛を得て、史跡公園の整備がなったばかりの「斎王の森」で第1回が開催された（表1）。「幼くして都を離れ、この地で生涯を閉じた斎王もおり、同じ女性として地元の私たちがその霊を慰めたい。」

という思いから実現されている。神職のお祓いの他、餅まき、カラオケ、大正琴の演奏披露などが催された。

翌年、昭和59年度には、斎宮の啓発と地域の発展に寄与することを目的として、都から斎宮までの行程を再現した斎王群行を実施するため、町内14文化団体が集まり「斎王まつり実行委員会」を発足させた。予行演習的な、緑の少年隊らによる三重県斎宮跡調査事務所（現在の地域交流センター）から斎王の森までの練り歩きも行われた。

昭和60年度の第3回から、群行を模した総勢約50名の斎王行列が始まった。この時の斎王は地元の小学生から選ばれ、その他商工会のバザーも行われるなどして約1,000人の観客が訪れた。その後、平成元年度の第7回から斎王・女官役の一般公募が始まり、斎王は女兒から成年の女性に変わった。参加団体やバザーの数は増加を続け、平成元年（1989）の横浜博、2年（1990）の大阪花博、6年（1994）の世界祝祭博（伊勢）などへの参加を通して知名度やマスコミの露出度も上がり、平成8年（1996）・23年（2011）には伊勢国司役として三重県知事が出演した。平成15年（2003）の第21回には58,000人の観客が訪れ、三重県を代表するまつりのひとつと認識されるようになった。

また、平成元年度の斎宮歴史博物館の開館や、その南の「ふるさと芝生広場」の完成、史跡中央部の「いつきのみや歴史体験館」「斎宮歴史ロマン広場」、史跡東部の平安時代初期（9世紀初頭）の斎宮寮庁の建物三棟を復元した史跡公園「さいくう平安の杜」、古代伊勢道の開園に伴って、斎王群行のルートを変えながら現在に至っている。

2) 現在の斎王まつりの概要

斎王まつりは、第2回以降は明和町内で国の天然記念物に指定されているノハナショウブの季節である6月上旬の土日の二日間に開催されるようになった。雨天により斎王群行が中止になったのは、第38回を迎えた令和2年度まで、まだ2回ほどしかない。

まつりのおよそひと月前から、史跡斎宮跡内のあ

表1 斎王まつりの沿革

年度	回	斎王まつりのあゆみ	斎王群行のルート	史跡斎宮跡の解明・史跡整備等
昭和57(1982)	1	地元婦人会を中心に、斎宮地区商工会の協賛を得て、3月28日に「斎王の森」で第一回斎王まつり開催。	—	「斎王の森」地区の公園整備。
昭和58(1983)	—	—	—	
昭和59(1984)	2	地域の発展に寄与する斎王群行を再現するため、町内14文化団体により斎王まつり実行委員会が発足。	—	
昭和60(1985)	3	第三回斎王まつりから、町内の女兒を斎王に、斎王群行を始める。観客は1,000人だった。	竹神社→斎宮駅→斎王の森	
昭和61(1986)	4	アトラクションとして、有爾中の鞆鼓踊りや皇學館大學の雅楽部が参加。	〃	「斎王の森」周辺の道路整備。
昭和62(1987)	5	坂本の獅子舞が参加。観客約3,000人	〃	「塚山公園」整備。
昭和63(1988)	6	参加文化団体が18となる。	〃	
平成元(1989)	7	斎王・女官役が一般公募となり（斎王がおとなの女性に）、群行コースも変更。観客が約8,000人。横浜博参加。	竹神社→参宮街道→博物館→斎王の森	斎宮歴史博物館開館。
平成2(1990)	8	明和太鼓が参加。観客約12,000人。大阪花博参加。	〃	
平成3(1991)	9	観客約15,000人	〃	
平成4(1992)	10	第10回を記念して前夜祭が始まる。「組曲・斎王物語」作曲。観客約20,000人。	〃	鍛冶山地区の第98次調査で平安時代の「内院」を発見。
平成5(1993)	11	前夜祭のご神火起こし始まる。地元女兒らによる「斎王の舞」が初披露。観客約30,000人。三重県平成文化賞受賞。	〃	博物館南の「ふるさと芝生広場」オープン。
平成6(1994)	12	大淀地区の業平公園で「禊の儀」を行う。フォトコンテスト開始。世界祝祭博参加。	〃	
平成7(1995)	13	民族衣装文化功労者表彰。初めて外国人が群行参加。	〃	
平成8(1996)	14	伊勢国司役に北川三重県知事出演。斎王が初めて町外から選ばれる。観客約45,000人。	〃	
平成9(1997)	15	原田副知事出演。観客約42,000人。大阪御堂筋パレード参加。	〃	
平成10(1998)	16	実行委員会事務所が町から独立。田川県教育長参加。観客約40,000人。「みえ歴史街道フェスタ」参加。	〃	
平成11(1999)	17	西場県議会議長出演。バザーが61団体となる。観客約40,000人。TVドラマ「斎王の葬列」出演。	〃	「いつきのみや歴史体験館」開館。
平成12(2000)	18	「いつきのみや歴史体験館」でお立ち式実施。上田副知事出演。観客約45,000人。新キャラ「さいひめ」作成。	体験館→斎王の森→竹神社→博物館	
平成13(2001)	19	観客約48,000人。「中部むらおこし物産展」・「第15回ニッポン全国むらおこし展」に斎王出演。	〃	史跡1/10模型・上園芝生広場を含む「斎宮跡歴史ロマン広場」オープン。
平成14(2002)	20	第20回を記念して「子供群行」も始める。萩尾望都氏・矢吹紫帆氏らを特別ゲストに招く。パンフレットの発行開始。バザー 95 団体に。観客約53,000人。	斎王の森→上園芝生広場→博物館	

年度	回	斎王まつりのあゆみ	斎王群行のルート	史跡斎宮跡の解明・史跡整備等
平成15(2003)	21	特別ゲストに矢吹紫帆氏・矢中鷹光氏。観客約54,000人む	〃	「国史跡斎宮跡無料休憩所（現いつき茶屋）」オープン。ガイドボランティア発足。
平成16(2004)	22	特別ゲストに長岡成貢氏。雨天により初めて斎王群行が中止になる。	〃	
平成17(2005)	23	博物館南の古里芝生広場に設営されるステージが大がかりになる。「梅まつり」への参加始まる。	〃	
平成18(2006)	24		〃	
平成19(2007)	25		〃	
平成20(2008)	26	前夜祭の禊の儀が、大淀会場から斎宮会場に移される。	〃	
平成21(2009)	27	史跡指定30周年を記念して竹神社に絵馬を奉納。前夜祭に子ども群行を行う。世界新体操選手権に出演。	〃	
平成22(2010)	28		〃	第171次調査で日本最古の「平仮名いろは歌」墨書土器が出土。
平成23(2011)	29	群行の博物館到着時の社頭の儀に、鈴木三重県知事が伊勢国司役、中井明和町長が斎宮寮長官役で出演。	〃	
平成24(2012)	30	「伊勢まつり」参加。	〃	「明和町歴史的風致維持向上計画」認定。
平成25(2013)	31	「伊勢まつり」参加。	〃	
平成26(2014)	32	「伊勢まつり」参加。	〃	
平成27(2015)	33	G7「伊勢志摩サミット」のジュニア・サミット参加。「さいくう平安の杜」オープニングフェスタ参加。特別ゲストに中井智弥氏。	〃	復元建物を含む史跡公園「さいくう平安の杜」オープン。古代伊勢道約350m復元。日本遺産認定。
平成28(2016)	34	長岡成貢氏により、テーマ曲「斎王～永遠の祈り」作曲。ウーマンズ・イノベーション・サミット参加。	平安の杜→参宮街道→博物館	
平成29(2017)	35		〃	「いつきのみや地域交流センター」オープン。
平成30(2018)	36	紀伊半島知事会議に斎王参加。	平安の杜→古代伊勢道→博物館	史跡西部の中垣内地区で、飛鳥時代の重要遺構が確認され始める。
令和元(2019)	37	令和改元を記念して、前夜祭にドラマ「大来皇女」を実施。	〃	
令和2(2020)	38	コロナウィルス感染拡大に伴い初めて斎王まつりが中止。9月に斎王のシンボルである檜扇の伝達式を行う。	—	

ちこちに紫地に白字で「斎王まつり」と染め上げたのぼり旗が立てられ、まつりのムードが高められる。

一日目の土曜日の朝8時頃から、実行委員会のメンバーが式内社竹神社（発掘調査で平安時代の斎王の居所「内院」に比定されている）への拝礼を行い、15時から斎宮歴史ロマン広場の一画で「禊の儀」（神事ではない）（図4）が行われ、17時から現在メイン会場となっている斎宮歴史博物館南の「古里芝生広場」で前夜祭（図5）が行われる。前夜祭ではス

テージ上での古式による火起こしや今年度の斎王のお披露目、花火の打ち上げなどがあり、周辺では斎王市の露店が立ち並ぶ。令和元年度には改元と、現在斎宮最初期の重要遺構の発掘調査が進められていることから、記録上初代の斎王とされる「大来皇女」をドラマ仕立てで紹介するアトラクションが行われた（シナリオ作成には博物館が協力）。

二日目の日曜日は、午前から古里芝生広場では斎王市やダンスグループの披露などのアトラクション

が行われる。13時に「さいくう平安の杜」の復元建物で群行の出発式（図6）が行われ、皇學館大學雅楽部による舞楽が奏されたのち、13時50分頃から列を仕立てて群行が開始される（図7）。かつては史跡南部の旧参宮街道を通っていたが、近鉄線の踏切を二回越えなければならず、時間の管理が困難として、令和2年現在は復元建物からいつきのみや歴史体験館に進み（図8）、斎宮歴史ロマン広場の外周道路から古代伊勢道を通して、東から西に向かいメイン会場の古里芝生広場に至る1km強のコースが取られている。現在の群行は約100人の規模で、群行の責任者である「長奉送使」らを先頭に、斎宮十二司の官人・検非違使・看督長、警備等の隨身、風流笠の持ち手、斎王の乗る葱華輦を担ぐ駕輿丁といった男性役の他、成人と子どもの二人の斎王（成人は葱華輦に乗る）（図9）をはじめ、命婦・内侍・女別当・乳母・女孺・采女と、児童による童・童女の役がある。約1時間をかけて群行したのち、メイン会場で伊勢国司（県知事もしくは近年は部長）、斎宮寮長官（明和町長もしくは副町長・教育長）が斎王一行を迎え、長奉送使の到着報告、伊勢国司らが歓迎の辞を述べる社頭の儀（図10、11）が行われ、斎王まつりは終了する。

3) 斎王まつりの運営

斎王まつり実行委員会は、会長以下、明和町商工会・婦人会・明和町観光協会・斎宮跡協議会（史跡斎宮跡の地権者の団体）・地元6自治会・明和町文化を守る会など18の団体が参画している。実行委員会本部のもとに約90人による総務班・着付会場班・着付班・まつり会場班・群行班・舞台設置班・広報班が置かれる。実行委員会設立当初は、事務局が明和町役場内に置かれ、会計事務などを役場職員が協力していたが、平成10年度から行政から完全に独立し、事務所も県の斎宮跡調査事務所があった建物に移された。現在は同地に新設された「いつきのみや地域交流センター」に隣接する明和町観光協会と同じ建物内に事務所を置いている。

現在の斎王まつりの予算額は年間約930万円で、

およそ半分の約440万円が明和町からの補助金、約330万円が企業協賛金、約65万円が町内自治会員からの一口千円の協賛金、約57万円の群行出演者の協力金などとなっている。

支出額の中で割合が大きいのが群行衣装費で、一社）民族衣装文化普及協会への委託など約150万円、ステージ製作や音響照明・司会などで約150万円、会場警備委託や臨時駐車場からの往復シャトルバスの借り上げで約130万円、事務費約100万円、ポスター・パンフレット印刷で約90万円などとなっており、毎年度の収入と支出はほぼ同額となっている。

このほか行政の支援として明和町からは当日の警備やゴミ回収などに職員のべ数十人の参加協力を、県の斎宮歴史博物館が当日の水道水等の供与と前夜祭での8時までの延長開館、パンフレットの原稿執筆などを行っているが、まつりの運営自体は完全に民間の団体が行っている。

4) 斎王群行の再現性

斎王まつりは斎宮歴史博物館が平成元年（1989）に開館する以前、昭和58年（1983）から、地元の方々の斎王と斎宮を大切に思い、地域に役立てたいという思いからスタートしており、斎王群行は斎宮の時代、とりわけ王朝文化の華やかな平安時代後期のイメージに基づいて構成されている。大極殿での発遣の儀は『延喜斎宮式』『西宮記』『江家次第』などから様子はうかがえるものの、斎王まつりの群行ではこの部分は省略されている。群行そのものの様子については、『延喜斎宮式』などから都からのコースはわかる他、斎宮勅別当を務めた藤原資房の『春記』から、天皇から斎王に菓子の入った銀の餌袋が贈られたエピソードや行程の苦労はしのばれるが、具体的な群行の形態などはわからない。現在行われている群行の配置や衣装については、地元で文化人として一目置かれていた方の考証により基本的な形が作られたという。斎王は十二単に表着・唐衣をまとい玉蔓に冠を戴き、檜扇を手に持つ。他の女官らは小桂など、男官は束帯、児童は水干などが準備されるが、衣装の形や色について詳細に有職故実に従って



図4 褌の儀



図8 斎王群行2



図5 前夜祭



図9 斎王群行3



図6 出発式



図10 社頭の儀1



図7 斎王群行1



図11 社頭の儀2

いるわけではない。そのため群行の隊列も、演出上の効果を考えて年によって少しずつ変更されることもある。また実際の群行には牛車や馬も用いられていたが、斎王まつりでは安全性と経費の面から用いていない。

また、令和元年度には前夜祭で初代斎王といわれる大来皇女を紹介したように、毎年細かく演出を変えている。例えば『伊勢物語』第69段の「狩りの使い」の斎王のエピソードを演出したこともあり、こうしたところで部分的に斎宮歴史博物館が考証の上で支援することがある。

斎王まつりは史跡斎宮跡にあって、その歴史を感じさせる代表的な行事であると広くみなされているが、その再現性については、実はそれほど正確ではなく、それに対して批判的な声も見られるようである。しかし、斎王まつりは、斎宮歴史博物館が開館する以前から、地元のボランティアによって運営され、年間数万人の観客を集めるようになって、根本は地域が支える地域のまつりであり、(平安時代にはありえないが) 群行等への地域の子どもの参加も重視しており、実行委員会スタッフのやる気と思いで成り立っている。かつての実行委員会長のひとり、斎王まつりで最も大切なのは、竹神社での斎王への鎮魂の祈りであるという。また、毎年斎王が確実に引き継がれていくことに意義を感じる方も多し。文化財の価値と地域の思いの接点として、博物館としても今の斎王まつりの在り方は尊重していくべきだと考えている。

(2) 追儼のまつり

歴史のある「斎王まつり」に対して、比較的新しい再現的行事として「追儼」がある。これは、平安時代の宮中において、年末に「えやみの鬼」と同一化した方相氏や悪霊・悪鬼を陰陽師が祓う行事で、「いつきのみや歴史体験館」(以下「体験館」)を中心に、毎年12月23日を中心に実施している。

平安時代の歴史体験が行える施設としてオープンした「体験館」を比較的行事の少ない冬季に活用することを目的として、平成11年度から博物館学芸員



図12 追儼 1



図13 追儼 2



図14 追儼 3



図15 追儼 4

が『政事要略』や『儀式』などをもとに衣装やシナリオの考証に協力している。斎宮でかつて「追儼」が行われた記録はないが、史跡内で五芒星やセーマンなどの線刻土器が出土することや、近隣の松阪市鴻ノ木遺跡で方相氏を描いた可能性のある墨書土器が出土しており、当地に陰陽道的なまつりがあった可能性が高いと考えられていることから、斎宮跡ではある意味最も再現性の高い行事であるといえる。

昨年度で第21回を迎えた「追儼」は、合わせて行う「餅まき」の餅とポスターの印刷等に約10万円の経費がかかる他はほとんど経費をかけていない。実施主体は（公財）国史跡斎宮跡保存協会（以下「保存協会」）であり、「追儼」に関するレクチャー・進行に斎宮歴史博物館の学芸員が出演している。「保存協会」は平成元年度に県と町の寄捐金をもとに設立され、史跡公有地の管理と来訪者の便宜を図ることを目的としており、平安時代を中心とした歴史体験ができる「体験館」の指定管理者となっている。

この行事に用いる衣装等は、斎宮歴史博物館が製作したものを「保存協会」に貸与している。登場人物は方相氏、陰陽師、仮子の他、ここ5年ほどは目に見えない悪鬼の代わりとして子どもを対象に『百鬼夜行絵巻』などにみられるお化け役を公募している。

全体の流れは、当日午後に学芸員からのレクチャーのあと、各配役の紹介があり、その後陰陽師が祭文を読み上げるとお化け役の子どもたちが逃げ惑うという所作を行う（図12、13）。その後「体験館」から「さいくう平安の杜」の復元建物や、「斎宮歴史ロマン広場」まで、方相氏（図14）を先頭に「なやろう」と口々に唱えながら参加者が一年の邪気を祓いながら練り歩く（コースは時々変わる）。その後「鬼」と書いた紙を的に、「けじめの弓矢」を射て終わる（図15）。

平安時代の文献を参考に「追儼」を再現している行事は全国的にも数少なく、斎宮で行う意義のある行事だが、毎年参加者は300人前後で、公募に対し応募者がやや少ないのが難という。

3. 史跡斎宮跡での再現行事と博物館

（1）史跡斎宮跡における再現行事のむずかしさ

以上のように史跡斎宮跡での「斎王まつり」と「追儼のまつり」の二つの行事を紹介した。「斎王まつり」は、博物館が開館する以前から、地域の住民が斎王の鎮魂と地域振興の思いで38年間も継続されている。現存する史料からは群行の形態をつぶさに窺い知ることはできない。群行に先立つ宮中大極殿で、天皇と最後の対面を行う発遣の儀式は『延喜斎宮式』や『西宮記』などからその次第を伺うことができるが、これらは夜間にしめやかに行われる儀式である。また、群行を終えて斎宮に入る際の所作や、その後の斎王の暮らしについても、『良子内親王歌合』にみられるような宮廷文化を写したイベントはあるが、これらを再現行事として実施するには情報が断片的である。

我々も来館者からしばしば「斎王は巫女ですか？」と質問を受けるように、そもそも斎王や斎宮の制度を一般に理解してもらう難しさは、身に染みている。さらに「斎王まつり」が始まった当初、発掘調査の進展がまだまだだった時代には、斎宮に対して描ける具体的イメージはかなり限定的なものだった。こうした中で、「斎王」「斎宮」を容易にイメージしてもらうためには、「斎王まつり」のような平安時代の十二単の姫君のイメージに頼ってしまうことは、致し方ない事であろう。

もちろん「斎王まつり」も、衣装や群行の隊列の考証など、時代の再現性を高める余地が無いわけではないが、そうした細部のこだわりへの要求が、まつりの熱を奪うこともありえるだろう。

（2）斎宮歴史博物館等の再現性へのアプローチ

このように平安文化のイメージが強い斎宮の再現行事ではあるが、冒頭で述べたとおり、斎宮の歴史は少なくとも飛鳥時代までさかのぼる。また、「斎王まつり」に表現される、現代人が持つ平安文化のイメージをすべて当てはめてしまうことは、斎宮の理解には障害になる場合もある。それに対する博物

館等のアプローチの事例を紹介する。

まず、斎宮歴史博物館では、その映像展示のひとつに、『春記』の記載に基づき、長暦2年（1038）の後朱雀天皇の良子内親王の群行について、大極殿での発遣の儀から頓宮での滞在、斎宮への到着までを描いた映像ソフトを用意している。製作費上の制限から、群行に登場する人数には限界があるが、より正確な群行のイメージを伝える役割を果たしている。

次にイベントでの音楽の問題に触れたい。

「斎王まつり」では、多くの場面でバックグラウンド・ミュージックとして雅楽が流される。群行の出立の儀には、地元皇學館大學雅楽部により「蘭陵王」などの舞楽が演じられる。しかし、実際には斎宮寮には朝廷の雅楽寮に相当する部署はなかった。平安時代初めには、伊勢神宮の新嘗祭に斎宮官人らが参加した際、その直会の場で皇大神宮では「斎宮女孺の舞」を豊受宮では「斎宮采女の五節舞」を奉じているが（『皇太神宮儀式帳』・『止由気宮儀式帳』）、これらは女官を管理した采部司が職掌していたと考えられる。その一方、『養老神祇令』散斎条には「凡そ散斎の内には（中略）音楽作さず」とされ、鎌倉時代の神宮側の記録である『古老口実伝』に、斎宮では「鼓笛音は院中禁忌とす（尺拍子を用いるなり）」とあって、音楽に対して一定のタブーがあったとみられ、斎宮内での音楽はかなり制限があった可能性がある。イベントにおいて雅楽や舞楽が演奏されることは、斎宮の持つ特性を見失う可能性はある。しかし、歌舞音曲のないイベントというものも一般的には考えられないだろう。イベントの実施の一方で、否定的と受け取られないよう配慮しつつ、博物館の各種講座や刊行物などで、歴史性の部分を示していくことが重要な務めと考えている。

こうした補正の事例としてもう一例紹介したい。「斎王まつり」の主たる舞台のひとつとなっている史跡公園「さいくう平安の杜」の復元建物は、斎宮の整備が最も進んだ平安時代初期（桓武朝～平城朝ころ）を想定して再現しているが、当時の官人や女

官の衣装はまだ唐風の服制を残しており、「斎王まつり」のモデルである平安後期の十二単に代表される服飾とは大きな時代差がある。これを補うために明和町は奈良時代末期～平安時代初期の雰囲気を持つ衣装を製作し、「保存協会」によってレンタルできるようにしている。これも歴史性の補正の手段であろう。

以上のように、歴史的な再現性という意味では、史跡斎宮跡で行われている行事は、あまり他所の参考になるものではないかもしれない。しかし、史跡のような文化財が、その保護だけでなく、可視的な史跡整備の進捗や、様々なステークホルダーの参画によって、地域のまちづくりに活かされていく場合、その地域地域にスタイルが生まれるのは当然である。そのスタイルを選択していくのにあたって、いかに文化財サイドが情報の提供ができ、地域とコミュニケーションできるかという信頼関係が大切であろう。

地域の行事がさらに歴史を重ね、斎宮への理解の進展を通して行事を磨き上げていく上で、斎宮歴史博物館が果たせる役割は多いと考えている。

※本稿を為すにあたっては、斎王まつり実行委員会および、（公財）国史跡斎宮跡保存協会の協力を受けた。ここに謝意を表します。

【参考文献】

- 辻孝雄・西山嘉治・木戸口眞澄・倉田直純 2010「（座談会）史跡斎宮跡指定三〇年を振り返って」『三重の古文化』三重郷土会
- 斎王まつり実行委員会 2012『第30回斎王まつり』パンフレット
- 斎宮歴史博物館 1998『特別展 斎王群行と伊勢への旅』
- 斎宮歴史博物館 2002『特別展 王朝人の四季—平安の年中行事と斎宮—』
- 明和町 2005『明和町史 斎宮篇』